

第 18 回日本認知症ケア学会大会 (沖縄)

2017 年 5 月 26 日～27 日

当院における認知症高齢者の弄便に対するエプロン付ズボンの試み  
—介護服からの離脱を目指して—

大阪 聖志会 渡辺病院

奥ひとみ 吉野栄子 友寄直美 松山美幸 太田三枝子

**【はじめに】** 便は感染源になり、取り扱いに注意を要する。弄便を認めた場合、すかさず便の処理を行う必要がある。予防策として定期的な排泄誘導や、排便前のもじもじ行為、力みをのがさず観察し弄便にいたらせないことが大切である。しかし弄便にいたる場合は多い。現在、介護施設では、原則介護服は使用しない。当院では、トレーナー上下にて療養していただいているが、弄便、便異食が著明な場合、医師の許可の下、市販の介護服を使用している。介護服は、弄便防止に有用であるが、時にご家族に外観上違和感を与えてしまう。そこで今回我々は、エプロン付きズボンを考案し着用してもらい、その後の経過を観察・分析したので若干の考察を加えて報告したい。

**【対象】** 介護服使用中の入院患者 10 名 (男性 3 名、女性 7 名)、平均年齢 79 歳 (60～92 歳) 主病名 AD : 8 名、VD : 1 名、FTLD : 1 名、平均 HDS-R : 2.4 (0～10)

**【方法】** 市販の割烹着タイプのエプロンと市販のトレーナーズボンを用意し、ミシンで腹部前方 20 cm を一部縫い付け、エプロン付ズボンとした。1 ヶ月間、対象者にエプロン付ズボンを着用して、その後の経過を観察した。

**【倫理的配慮】** 本研究に際して、施設管理者の承諾と家族の同意を得、個人が同定されないよう配慮し、倫理委員会の承認を得た。

**【結果】** 着用者 10 名中 6 名が、介護服からエプロン付ズボンに順調に変更可能となった。複数のご家族から、介護服に抱いていた違和感がなくなり、エプロン付ズボンへの好印象を示していただいた。変更できなかつた 4 名中 2 名は容易に脱衣し裸になる、1 名が徘徊、焦燥感が増悪、1 名がサイズが体格が合わずおむつ交換に時間がかかり過ぎるため継続できなかつた

**【考察】** 我々の考案したエプロン付ズボンによって、半数以上の方が介護服からの離脱に成功し、ご家族からの好印象をいただき、今後、介護服着用前にまず試着してみる必要があると思われた。